

外国籍児童生徒への教科・母語・日本語相互育成学習

事業責任者： 半原 芳子（教育学研究科・特命助教）

代表学生： 片川 絵里奈（教育地域科学部・4年）

概 要	
	<p>本事業は、グローバル化の進行に伴い近年急増している福井市内の公立小・中学校で学ぶ外国籍児童生徒への学習支援を目的とするものである。具体的には、日本語初期指導が終了した福井市内の公立小・中学校に在籍する外国籍児童生徒に対し、子どもの母語と日本語で教科学習を行う支援を、福井大学の教員・留学生（子どもと母語を同じくする留学生）・日本人学生がチームを組み行う。本支援の特徴は、日本語支援だけでなく子どもの母語を保持・育成することを視野に入れていること、そのため子どもの母語を持つ留学生と日本人学生がチームで支援を行っていることにある。5年計画で3年目となった今年度は昨年度に続き地域貢献事業支援金による助成を受け、述べ22名の福井大学の学生が市内の四つの公立小・中学校での通年支援の実施をはじめ、ふくい市民国際交流協会主催の公民館での「日本語サポートクラス」への参加、さらには学校に行きにくくなっている子どもを対象にした夏休み・冬休み学習教室を福井大学にて開催した。</p>
関連キーワード	多言語多文化共生、日本人学生と留学生の協働、学校・地域・大学の連携

事業の背景および目的

近年、福井市内の外国籍児童生徒は増加の一途を辿り、平成26年度の調査時点において、小学校に78名、中学校に40名の子どもが在籍しているという報告がある。外国籍児童生徒は来日に伴い、それまで母語・母文化で培ってきたものから断ち切れ母語の民族的活力が弱い社会および学校に入っていくことにより、認知的な発達の中断やアイデンティティー・情意面の不安定、また母語と日本語の二言語不十分といった問題に直面する恐れがある。現在、福井市は、公益社団法人ふくい市民国際交流協会が福井市教育委員会の委託を受け外国籍児童生徒に対し日本語の初期指導を行っている。しかし、日本語初期指導終了後は、学校が外国籍児童生徒への対応に苦慮する現状や、最近では学校に行きにくくなっている子どもへの対応が課題となっている。

本事業は、日本語初期指導が終了した福井市内の公立小・中学校に在籍する外国籍児童生徒に対し、子どもの母語と日本語で教科学習を行う支援を、福井大学の教員・留学生（子どもと母語を同じくする留学生）・日本人学生がチームを組み行うものである。本支援によって、外国籍児童生徒の認知面・情意面の継続的な発達が保障されるとともに、日本人学生と留学生の協働する力・探究する力の育成、学校および地域との連携の発展、さらには、外国人を含めた全ての住民が既存能力を最大限に発揮できる多言語多文化共生社会の構築がはかれると考えている。

事業の内容および成果

5年計画で3年目となった本事業は、前年度に引き続き地域貢献事業支援金の助成を受け、福井市内の外国籍児童生徒への学習支援を充実・拡大することができた。具体的には、①福井市内の四つの公立小・中学校での通年支援の実施（昨年度より2校増）、②ふくい市民国際交流協会主催の公民館での「日本語サポートクラス」への参加、③学校に行きにくくなっている子どもを対象にした夏休み・冬休み学習教室の開催（今年度初）、を行うことができた。①の学校での通年支援は、時間割の中での支援（取り出し支援）と放課後支援の二つがある。例えば、福井市A小学校ではフィリピンにルーツを持つ小3の児童2名に対し週に1回の取り出し支援（国語・算数）を行っている。また、外国籍生徒が多く在籍する福井市B中学校では週に1回放課後に教室を借り、そこでフィリピン出身の生徒や日系ブラジル人の生徒達に五教科の学習支援を実施している。①～③の支援はいずれも学校や地域の方との連携・協力の上で進められているものである。

今年度この事業に参加した学生は、教育地域科学部・国際地域学部・工学部・教育学研究科・工学研究科の学部生および大学院生、交換留学生、教員研修留学生、科目等履修生ら述べ22名である。留学生の国籍はフィリピン・中国・インドネシア・オーストラリアなど多岐に渡る。学生は支援を通じ多様な他者と協働する力を育むとともに、自ら主体的に課題を見つけ探究する力・表現する力を培っている。例えば、本事業の学生代表者は2016年10月より移民受け入れの最前線であるドイツに交換留学生として留学し、現在移民の子ども達の教育がどのように行われているかを探究している。また、今年度新設された国際地域学部の学生は、「日本にいる外国人を支援したり日本語を教える仕事がしたい」という将来の目標を育んでいる。さらに、2017年2月福井大学で行われた「実践研究福井ラウンドテーブル」では複数の学生が参加し、自分達の取り組みを多くの学校・大学関係者らに報告・発信している。こうした学生の成長も本事業の大きな成果である。

参考文献・添付資料および特記事項等

本事業は、学校の先生方、「日本語サポートクラス」で学生と共に活動をして下さっている地域の方々、ふくい市民国際交流協会の辻端聡子さんから多大な理解と協力をいただいている。

事業名称:外国籍児童生徒への教科・母語・日本語相互育成学習

事業責任者: 半原芳子 (教育学研究科・特命助教) 代表学生: 片川絵里奈 (教育地域科学部・4年)

キーワード : 多言語多文化共生 ・ 日本人学生と留学生の協働 ・ 学校と地域と大学の連携

福井市内の公立小・中学校に在籍する外国籍児童生徒に対し、子どもの母語と日本語で教科学習支援を実施する

背景

- グローバル化に伴う外国籍児童生徒の増加 (H26調査 福井市内 小78名 / 中40名)
- 日本語初期指導期間終了後、現場は対応に苦慮

特徴(内容)

- 日本語だけではなく、子どもの母語も大事に育てながら教科の学習を行う
- 日本人学生と留学生が協働する

公民館・交流協会施設

留学生
(一般入学の学生・
教員研修留学生・
交換留学生・科目等履修生)

国際交流協会
スタッフ・地域ボラン
ティア

大学教員

日本人学生(教育地域科学
部・国際地域学部・工学部・
教育学研究科・工学研究科)

協働実践

教科・母語・日本語
相互育成学習

管理職・担任・
コーディネーター
の先生

公立の小・中学校

成果

- ①市内の四つの公立小・中学校での通年支援の実施
- ②ふくい市民国際交流協会主催の公民館での「日本語サポートクラス」への参加
- ③学校に行きにくくなっている子どもを対象にした夏休み・冬休み学習教室の開催

→ 外国籍児童生徒のより良い学習および学校・地域・大学の連携発展に寄与